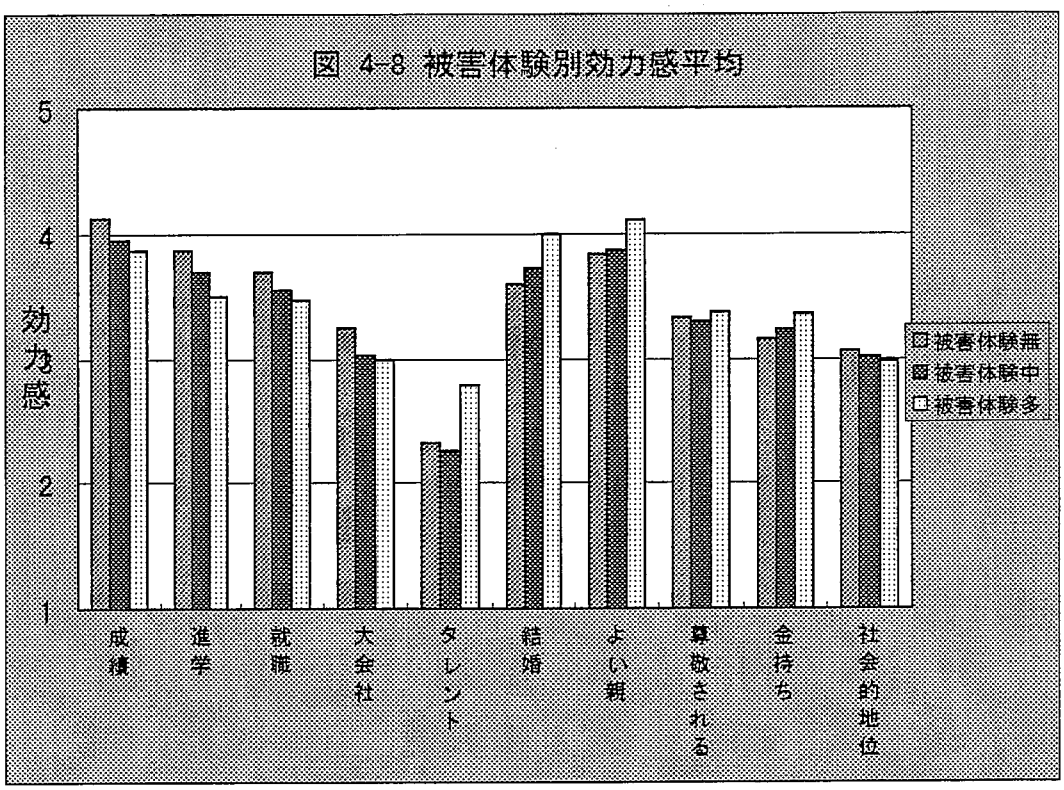
相を異にし、むしろ逸脱行為の多少による違いと同様のパターンを示している。すなわち学業達成や職業達成では被害体験多群で効力感が低く、逆に家庭的幸福においては被害体験多群で効力感が高くなっている。被害体験有無による相違において、不良行為の多少による相違と同様のパターンが見られたことは、両者の関連を示唆するものである。実際不良行為得点と被害体験得点とは全体的にはほぼ無相関であるが、例えば中学３年生において、被害体験無し群の場合、その中で不良行為多群の占める割合は27%にすぎないが、被害体験多群の場合には、不良行為多群の割合は65%に達している。被害体験については、経験がないとするものが大多数なのであるが、不良行為の多い少年の場合いくぶん被害にもあいやすい状況がある、特に中学生においてはこのような状況があるのではないかと考えられる。



４．逸脱行為や被害体験・被害不安と重要度の関係

不良行為別の重要度の平均を図４－９に示した。効力感と似たパターンを示しており、不良行為の多い少年では、学業達成において相対的に重要度を低く評価し、逆に家庭的な成功の重要度を高く評価している。これは効力感のパターンと一致している。しかしながら職業達成に関しては、不良行為の多い少年では効力感が低くなっていたが、重要度につ

いてはそれほどはっきりした違いが認められない。それゆえ不良行為の多い少年では、将来の職業達成を重視しているにもかかわらずその効力感が低くなっており、両者のずれが大きくなっていると考えられる。

図 4-9 不良行為別重要度平均

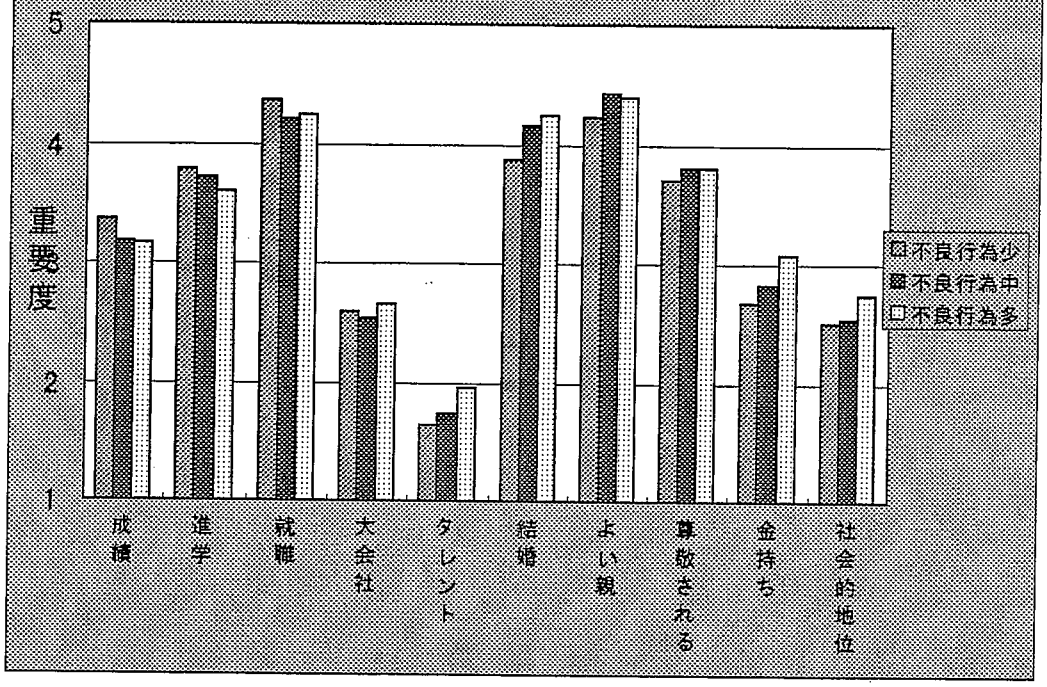
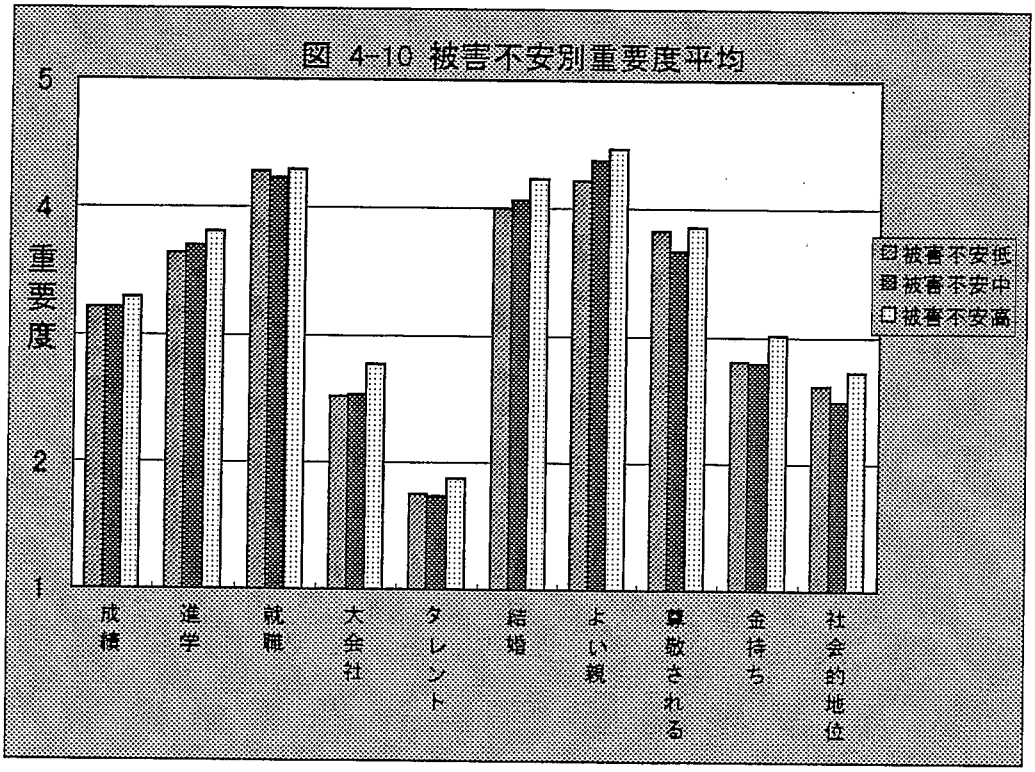
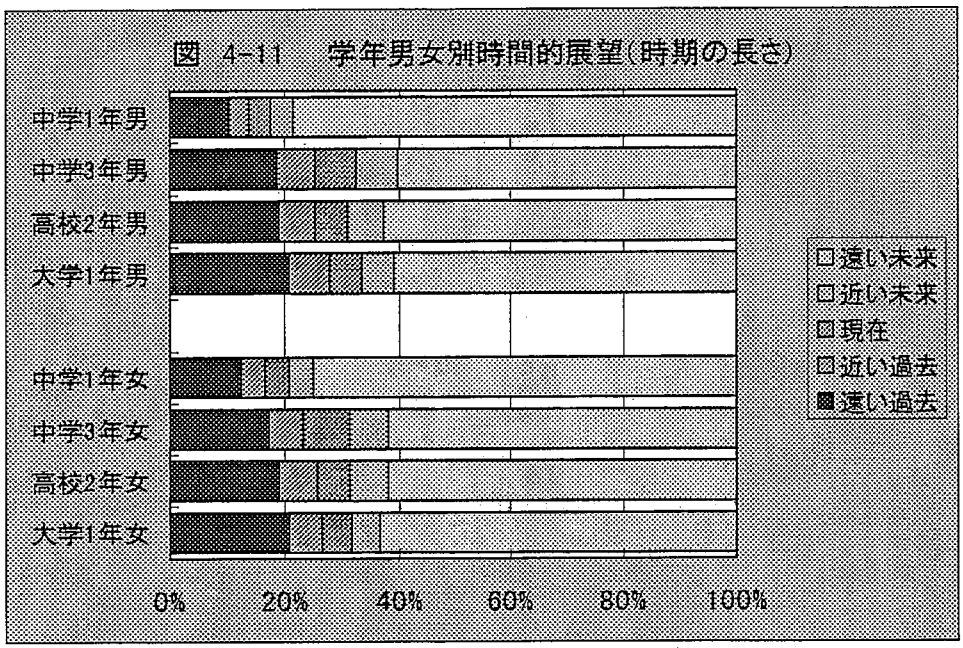


図 4-10 被害不安別重要度平均



被害体験の有無と重要度についてははっきりした関連が認められなかったが、被害不安の高低に関しては、いくつかの違いが認められた。被害不安別重要度の平均を図４－１０に示した。学業達成、職業達成においては差は顕著ではなかったが、家庭的な成功において高不安群がより重要視している傾向が認められた。生活上の不安を強く持っている群では、家庭的な幸福を大事に考えており、それゆえに生活上の不安も強く感じられるのであろう。

５．逸脱行為と時間的展望との関係

本調査では、先行研究を参考にして以下のような方法で青少年の時間的展望について調査した。　縦５cm、横約４０cm の横長の四角の箱を示し、箱の左端を誕生、右端を死、箱全体を人生全体と考え、その箱の中に自分の人生で重大と思われる出来事を５～１０個程度書き込むように指示した。さらにその後、現在、現在から半年前と半年後、現在から３年前と３年後がどこに位置するかを箱の下部に記号で示すように指示した。このような手続きによって、箱を人生全体と考えたとき、人生を誕生から今から３年前まで、３年前から半年前まで、半年前から半年後まで、半年後から３年後まで、３年後から死までの５つの時期に区分することができる。この５つの時期をそれぞれ遠い過去、近い過去、現在、近い未来、遠い未来と呼ぶことにする。これら５つの時期の分けたときの相対的な時期の長さ及びそれぞれの時期に書き込まれた出来事の数を指標として用いた。